

阿蘇山

本多 彪

1932年の夏、阿蘇山上の熊本測候所附属阿蘇火山観測所に就職したころは、山上には観測所のほかに阿蘇山上神社と西巖殿寺の山上本堂と茶店が二、三軒あった程度で、山ろくの坊中との間に登山バスが開通して間もないときであった。(第1図、第2図)。

つとめてから1週間ほどたつと、中岳第1火口が突然黒煙をあげて爆発した、学生時代には、火山の講義もきき、卒業論文には火山を地質・岩石学的に調べもしたが、“なまの火山の噴火”に出会ったのは、このときがはじめてであった。

さっそく、中岳火口縁にのぼって、火口観測をすませ、登山バスで下山し、坊中局から電話で熊本測候所に噴火報告をした、この噴火報告は、常設火山観測所の火山観測者の手で報告された点において、気象界いな日本でも、はじめてであろう。

同年10月11日、中岳火口のほぼ中央部の浅い第3火口底に下り、ここから第3火口と第1火口間の第2火口に下り、第2火口底の湯池の南辺部の地温 100.3°C (地表下約30cm)と湯の温度70.0°Cを測定し、目的の第1火口丘内にけいり、黒煙噴く第1火口の約10mのそばまで冒険にも迫って第1火口内を観測した。中岳火口縁を見あげたときには、観光客たちがこの活動火口内の冒険者を見はっていた。(第2図)。

その後、第1火口はますます盛んになり、1933年2月24日には、第2火口も大爆発的噴火をはじめ、3月上旬まで第1火口ときそうて赤熱溶岩塊片、ときには黒煙を多量噴出し、阿蘇山有史最大の活動をした、この間、噴火最盛時、ことに夜間は、第1火口、第2火口から噴出された多数の赤熱溶岩塊片は明るく赤く尾を引いて中岳の外斜面に落ちてはこわれ、こわれてはころがっていた、この活動火口の西方約1.2kmの距離にある火山観測所では、熊本測候所員の応援を得て、この噴火を徹夜観測し、貴重な噴火観測資料を作製していたが、火山観測所前の広場は、この阿蘇の御神火を見に、遠く熊本市から自動車で乗りつけた人とその自動車がいっぱいになった。

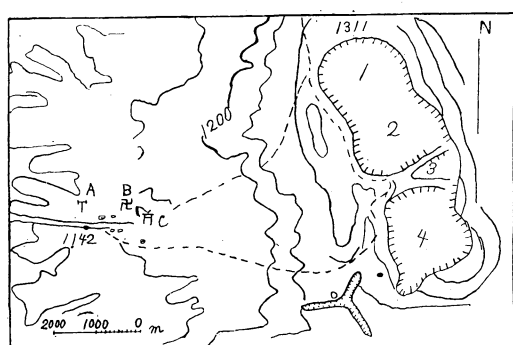
ある昼間、噴火の合い間に、活動火口から西方水平距離約500mの地点まで、中岳西側外斜面を上をのぼっていた。もちろん、活動火口は外斜面頂のかげでみえない、行く手の空に、不気味なすす青い煙が細くひとすじ立ち



第1図 阿蘇山の概況

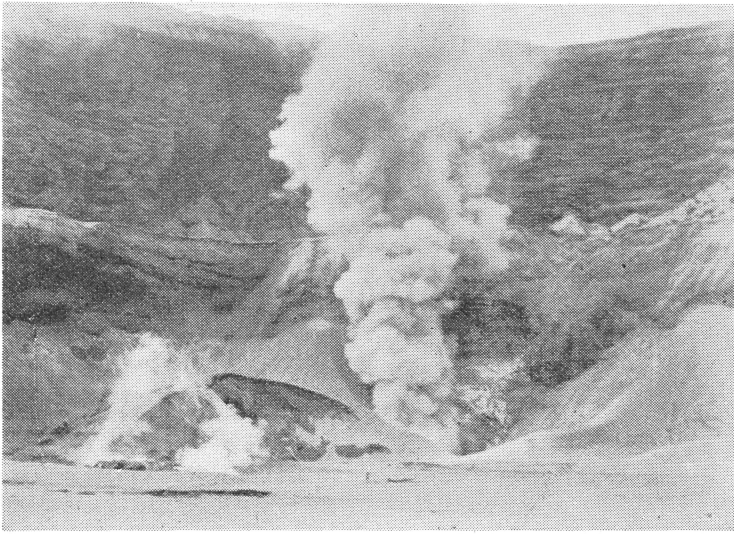
Ta : 高岳	Oo : 往生岳	Tr : 垂玉温泉
NE : 根子岳	Ok : おかまど山	Ji : 地獄温泉
Na : 中岳	Yo : 夜峯	To : 柝の木温泉
NO : 檜尾岳	Ko : 米塚	Ut : 内の牧温泉
Eb : 烏帽子岳	Ja : 蛇の尾	Tw : 俵山
Ki : 杵島岳	Yu : 湯の谷温泉	Ka : 冠ヶ岳

のぼったとみる間に、たちまち、目の前には、大小の赤熱溶岩塊片が多数いっばいに広がっていた、もう遅かった。それでも、本能的といわうか、夢中になって、これらの飛びくる赤熱溶岩塊片を背にして逃げていた、遅いようでも、この溶岩塊片の速度は早い、逃げるのをあきらめて、これらの飛びくる溶岩塊片の方向に向かって、剣道の試合のときの身構えで、大きな溶岩にあたらないようにと、からだを右または左へと動かしていた、このとき、左手は頭の上におかれ、顔を防いでいた、ま冬のため、オーバーを着、スキー帽をかぶり、脚には脚はんをまいていたため、この左手の手首と肩に小石をうけて



第2図 1932年ごろの阿蘇山上

A : 阿蘇火山観測所、B : 西巖殿寺(坊中)の本堂、
C : 阿蘇神社(宮地)の山上神社、
(図の2000mを約300mと訂正)



第3図 阿蘇山・中岳第1火口の噴煙、後方(西方)には中岳西側火口縁が、そのさらに後上方には中岳西側頂上部がみえる(1932年中岳東側火口縁から第1火口内を写す)。

はれあがり、こぶとなり、脚はんが破れた程度ですんだが、下山の途中には、メートル大の赤熱溶岩が多数落下していた。奇蹟的にも、命がよくも助かったものである。

この噴火後には、九州をはじめ、関西地方遠くは東京方面の観光客が、列車が坊中駅につくごとに、毎日多数下車し、登山バスまたは徒歩で中岳火口に集まった、大部分の観光客が高級な舶来カメラをもって中岳火口を写しては帰っていく平和観光時代であったので、山上には郵便局が建てられて山上ただ一つの電話が設けられ、茶店が増設され、山ろくの玄関坊中駅はモダンな山の観光駅に改築された。阿蘇火山観測所には、毎日参観者があり、内外の名士も来られて中岳火口に御案内したことも多かった。参観者には、“阿蘇山の最高峯は1592 m (熊本県は肥後の国)です”とお伝えすることにしていた。

気象観測も次第に充実されていった、雷雨観測、霧観測が開始されたのもこの時期であった、夏になると、第一、第二、第三……の雷雨が違った方向から阿蘇山に襲来しては、目の前1 km くらいの所に電光をつきたてては通過していった、初めから終わりまで、雨がっぱを着たまま、露場に立って、雷雨観測連続2時間以上に及んだときには、ま夏ではあったが、からだがつすかり冷えきったので、こたつをつくって、はいりこみ、暖をとった。

阿蘇山は霧に閉じこめられる点では、気象官署中でも有名であって、全月霧の中で暮したこともあった。

生物季節も新しく観測し始めた、山には、春には美しいヤマキリシマ、夏にはかわいらしいイワカガミ、マイヅルソウ、秋にはけだかいリンドウの花が咲き、春のハルゼミ、夏のホトトギス、カッコウ、冬のカモなど、山の生物観測はいそがしかった。気候のよいときの朝夕

、寺のおつとめごろに、木経をたたくような音でなくヨタカも風情があった。

当時、常時火山観測方法が日本には、おそらく世界にもなかったようである。阿蘇山を師として、毎日火山観測を続けては、火山観測方法を打ち立てていった；昼間の観測は、もちろん、最終の観光バスが山上を下っていくのを見送りながら、ことに、ま冬はスキー帽にオーバーの服装、身に観測七つ道具をつけて、単身、夜の火口観測に向かった、火口縁は常に -10°C 以下の温度で、足もいた冷たくなる、鳴動は高くて声も聞えない、赤熱溶岩は多数打ちあげられ、火口からはまっ赤な炎がもえあがる。観測にわれを忘れて、観測所に夜遅く帰ったこともある、空はすみわたって星は美しく、阿蘇の諸峯も黒く姿をあらわし、山上の夜の阿蘇は静寂そのものであった。

これらの観測結果は、月末には、昼も、夜はランプの下で、ただ一つの事務室兼寢室の4畳半で整理されて、熊本測候所と中央气象台に報告された。

このように、二十代の身で、阿蘇火山観測所をお預りして、火山観測と山上気象観測の業務を創設開拓してきたが、あしかけ7年ののちには、身心ともに疲れはてて、阿蘇山ともお別れした。その後、間もなく、実務室4畳半の観測所も新築拡大されて、当時の、多分、一等測候所に昇格され、最近まで気象界の常時火山観測者のメッカとなっていた。

このように、活動火口から1 kmの近距離に常設火山観測所をもって、いながらにして、火山活動の実態を常時観測し続けられることは、阿蘇外輪山の形が立派で大きいことが世界一であることとともに、阿蘇山が世界に示す日本の誇りである。

(1955, 1, 30)。 (中央气象台地震課譲)